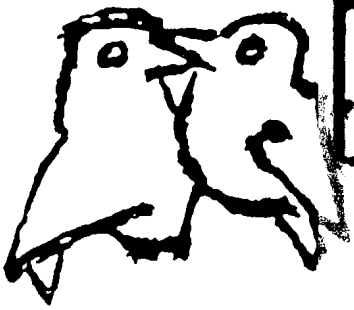
武者小路實篤全集

武者小路实笃全集

浙江工业大学院图书馆
藏书章



第十四卷

武者小路實篤全集　第十四巻

一九九〇年二月二〇日　初版第一刷発行

著者――武者小路實篤
発行者――相賀徹夫
発行所――小学館
〒一〇一―〇一　東京都千代田区一ツ橋二丁目三番一号
振替　東京八―二〇〇番
電話　編集・〇三―三二三〇―五一三四
業務・〇三―三二三〇―五三三三
販売・〇三―三二三〇―五七三九

印刷・製本――大日本印刷株式会社
用紙――三菱製紙株式会社

＊著者検印は省略いたしました。　＊造本には十分注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。　＊本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

Printed in Japan　ISBN4-09-656014-6
© Mushakōji Saneatsukai 1990

目

次

愛情の書……一
自序……三
息子の結婚―四幕―……四
若き大雅堂……三四
ある詩人の夢―狂言―……四二
実朝の死……四七
義時と泰時……五五
田舎娘……六〇
父の笑ひ―四幕―……七八

狂言集……一〇三

開会の口上……一〇五
刀をとぐ男……一〇六
鼻の頭……一一一
百姓親子とロバ……一一二
詩人の夢想……一一四
信長と秀吉（寸劇）……一二三
泥棒と主人……一三四
おせつかいな夫……一三六
彼の誕生……一三七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

牛若丸……一四八
新しき村の満十五年を祝して……一五四

木竜忠臣蔵……一五七
木竜忠臣蔵……一五九
一、本蔵の家の場　二、刃傷の場　三、判官切腹の場　四、与一兵衛の家の場
五、勘平切腹の場　六、一力の場　七、師直の居間　八、山科閑居の場
九、夜討の場
由良之助の最後……一九二

七福神……一九九
序……二〇二
七福神（狂言）……二〇三

野菜讃……二二七
序文……二二九
野菜讃……二三〇
果実讃……二三九
花讃……二四三
読書余録……二四八

一切経翻刻成就 一 尊徳の至誠家老を動かす 一 良寛の「月の兎」一 那須与市 一 真剣勝負 一 崋山の死 一 仙厓と魚の骨 一 不仁の村を仁儀の村にする法 一 或る笑 一 死を先にするもの 一 独歩の「少年の悲哀」に就て

撫松庵随筆……二六〇

ある画家とある蛙 一 どんな時でも 一 生れた以上は 一 いい作家 一 悪い作家 一 悪趣味 一 悪 文 一 自 信 一 難 関 一 忠 告 一 出来る確信 一 力 一 ミケルアンゼロの力 一 鉄 斎 一 バレリーのマラルメ讃 一 大 木 一 微 妙 一 緻密と大 一 馬鹿の一つ覚え 一 ずるい男 一 可憐な話 一 近頃痛快な事 一 ある展覧会で 一 文 学 一 真 剣 一 全精神 一 意 地 一 大 道 一 善 意 一 新しき村の生活 一 若き画家に 一 「三笑」のある評 一 批 評 一 図々しく 一 性 急 一 種まくこと 一 忠言と甘言 一 悪 評 一 元 気 一 大きな心 一 芸術家は 一 劇の会話 一 良寛の画 一 孫の誕生 一 その男を礼拝する 一 この世に 一 くよくよ 一 善 人 一 真 理 一 一 真 理 二 一 小さん（先代） 一 摂津大椽 一 オフェリア 一 人形芝居と理屈 一 感心したふり 一 自分が利口 一 他人に註文 一 生きてゐる間は 一 一日一日 一 孫 一 勇 士 一 一本の杉 一 僕 は 一 尊敬する人間 一 偉さ 一 この世に 一 勇士の散歩 一 元気な男 一 ヴイオリンの名人 一 人間の心 一 光琳と乾山 一 宿 命 一 岸田劉生のある「麗子像」を見て 一 秋 一 岸田劉生の一弱点 一 天を相手 一 上には上 一 深山の桜 一 谷崎氏の随筆を見て一寸 一 三等国 一 「三笑」の上演に就て

三　笑……三二一
芸文座の「三笑」を見て……三四五
それ程でもないよ（一名「老優の笑ひ」）……三四七
「それ程でもないよ」（一名「老優の笑ひ」）に就いて……三七七

芸に生きる人々・生き残つた者……三八三

『芸に生きる人々』

序……三八五
ある彫刻家……三八五
盲目と聾者……三九七
女の一念……四〇二
牟礼の生活……四〇五
山をかく男……四一〇

『生き残つた者』

序……四二七
飛田先生……四二八
鏡の話……四四二
或る作家の演説……四四九
混沌……四五四
英次の手紙……四五八

生き残つた者……四六二
友　達……四六七
業の深い男……四七三
或るものゝ意志……四七六
一休と地獄太夫……四八一
一休と地獄太夫の対話……四九五

若き日の思ひ出……四九九
若き日の思ひ出……五〇一
後書き……六〇五

解　説・解　題……大津山国夫……六〇七

愛情の書

〔『愛情の書』函。著者自装〕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〔口絵〕

自序

この本を愛情の書と名づけたのは、この書にのせられたものは殆んどすべて例外もあるが、親子の愛情、男女の愛情をかいたものだからである。愛情がよりすぎて甘いものもあるかと思ふ。現世は甘くないから、せめて芝居のうちでも甘くなりたい。現世では本当の愛情を中々生かしにくいからせめて脚本の中でも純な愛情を生かして見たい。そんな気もちも書く時あつたのだと思ふ。自分の創作が読者にどんな感じを与へるか知らない。芝居にやつてもらいたいといくらか思ふのは「大雅堂」位いのものだ。僕はこの頃創作をしたいとは思はない。又こんなものを読んで喜ぶ人が別にあるとも思はない。しかし本屋のすゝめで出すことにした。

口絵は「大雅堂」に出てくる大雅と町の人となりが、この絵に出てゐると思つたので、出すことにした。かいた人は三熊思孝だ。

田舎娘は発声映画の台本の筋がきがはりとして書いたものだ。

しかしこの本の悪口を言ふ人があれば、僕はこのなかにある、すつきりした愛情のこもつた調子が、出せるものなら出して御らん。感心して上げると言ふ。しかし悪口言はない人には、僕は何処迄も謙遜して、いやつまらぬもので、と言ひたい。

しかし別につまらぬものときめてゐるわけでもない。読者の判断にお任せする。喜んで下さる人があれば、別に悪い気はしないと思ふ。しかし大して喜ぶ気もしないつもりだ。

昭和十三年十一月十一日

息子の結婚

——四　幕——

現代
人物
仲田広雄
同　米子
同　広一郎
東　野　崎
三好たか子

第一幕

（仲田広雄、応接間で本を読んでゐる。妻米子登場）

米子　東さんからお電話で、之からお伺ひしてもいゝかとおつしやいました。

広雄　どうぞ、御待ちしてゐますとさう言つてくれ。

米子　はい。

（広雄、又本を読んでゐる。米子登場）

米子　あなたは東さんを御好きね。私はあの方好きぢやないわ。

広雄　なぜ？　いゝ奴ぢやないか。

米子　いゝ方だけど、いつもいやなこと許りおつしやるのですもの。

広雄　昔はあゝでもなかつた。子供が死んでからすつかりかはつたね。

米子　あんな目にあつてはたまりませんね。

広雄　たまらないさ。

米子　随分お出来になつたのに。

広雄　出来たのがいけなかつたのだ。

米子　勉強をなさりすぎたのね。

広雄　学校が勉強させすぎたのだ。

米子　あの学校は少し勉強させすぎるさうですね。

広雄　なまければいゝのだが、正直に勉強しすぎたのだ。それにいつも一番だつたのもよくなかつた。

米子　あなたのやうだと大丈夫ですがね。

広雄　無理がきゝすぎる身体は困つたものさ。

米子　其処へゆくと広一郎は大丈夫ですね。

広雄　あいつは馬鹿ぢやない。

米子　そんなことを言つたら、東さんはさぞお怒りになるでせうね。

広雄　東の子だつて馬鹿ぢやなかつたがずぼらな処がなかつたのだ。先生の言ふことをあまり馬鹿正直にとつたのだ。

米子　それだけで死んだわけでもないでせうが。

広雄　勿論、勉強だけで人は死にはしないが、東の子の場合は怠ければ助かつたことはたしかだ。僕は時々注意したのだが、嫉妬

してゐるやうにとられるのがいやで、あまり強くは言へなかつた。

米子　あなたにもそんな神経があるの。

広雄　ありすぎるよ。だからないやうな顔してゐるがね。

米子　学校を卒業をすると同時に死なれては困りますね。

広雄　いつ死なれても困るよ。

米子　本当ね。だけど広一郎は大丈夫ですね。

広雄　まあ大丈夫だらう。さうしておくより仕方がない。心配しては切りがないからね。

米子　私、この頃、広一郎の結婚のことが気になつて困つてゐるのです。早くいゝよめを持たさないと、どんなことがおこるかわかりませんからね。

広雄　馬鹿じやないが、おれも考へてはゐるのだ。

米子　女のことは私の方がわかりますからね。あなた一人でおきめになつてはいけませんよ。

広雄　広一郎の気持はおれの方がわかるよ。

米子　どうですかね。

（女中登場）

女中　東さんがいらつしやいました。

米子　さうを。

（米子、女中退場、まもなく米子、東、登場、広雄、東、かるく挨拶する）

東　じやまじやなかつたか。

広雄　じやまなものか。この頃いたつて閑だよ。

東　そうか。

広雄　君は忙がしさうだね。

東　相変らずだ。

広雄　金がもうかつて困るだらう。

東　さうもゆかないよ。

米子　本当に結構ですわね。

東　結構なのは仲田の身の上ですよ。

米子　どういたしまして、この頃は。

広雄　（目くばせして）なにか面白いことがあるか。

東　別にないね。だん〳〵世の中は面白くなくなりさうだね。

米子　そろ〳〵始まりましたね。

東　本当ですよ。何しろ非常時ですからね。一触即発ですからね。危険この上なしと言ふ気がしますね。

広雄　まさか戦争もするまい。

東　あてにはならないよ。

広雄　それはわからないがね。

東　まあ、あるものと見た方が本当じやないかね。

広雄　其処で大いにもうけやうと言ふのか。

東　まあ、さう思つてゐるものも多さうだが、しかし今度はさうはゆくまい。それは始めはうまくゆくかも知れないが、今度は生命があぶないからね。

広雄　だが僕は戦争はないと思ふな。今度なつたら、その結果は想像が出来ない。

東　しかし七分三分と言ふ処だね。油断は出来ないよ。男の子を持つてゐない者は仕合せだと思ふね。

広雄　おどかすなよ。

東　だが、油断は出来ないよ。東京にだつて一台や、二台は飛行機がとんでくると思はなければね。

米子　東さんはそんな話がお好きね。

東　好きぢやないのですが。
広雄　嫌ひでもないやうだね。しかし僕等国民は、政治家や軍人に信頼して、何とかうまくやつてもらへると思つて安心してゐるより仕方がないね。だから僕は心配しないのだ。病気の時は医者に任せて、その人の言ふ通りにするより仕方がないからね。
東　名医がゐてくれゝばいゝが、藪医者の言ふことをきくのではたまらないね。
広雄　しかし素人よりはましだらう。少くもまあさうして安心しておくのだね。心配し甲斐があれば心配するがね。
東　しかしさう言ふ呑気ものが多いので、藪医者までが、偉さうな顔して、一角、名医のやうな顔が出来るのじやないかね。国民がもつと自覚すれば、名医と藪医の区別がはつ切りするのぢやないか。
広雄　名医がゐてくれゝば、僕だつて、その人の意見を聞いて見る気になるし、自分の意見も聞いてもらいたい気がするがね。そんな名医がゐるか。藪医者で我慢するより仕方がないのぢやないか。
東　そんな処かも知れないが心細い話だね。
広雄　一体政治家と言ふものゝ存在価値すら僕は疑つてゐるのだ。世話をやく者ならゐてもいゝがね。実際、政治家と言ふものは、公けの小使にすぎないものぢやないかと思ふね。だから税を集めたり、汽車を走らせたりするのは立派な役人だ。しかし集めた金をつかふ時、国民の利益を忘れたらそれは立派な役人とは言へない。たとへば東京市の市長がやめたと言ふのでばく大の金をやるのなぞは、僕にはどうしても腑におちないのだ。税をさう言ふことには一寸つかつてもらいたくないと思ふ。市民のために働いてゐるものが、市の税で生活するのはわかるがね。お手もりと言ふ奴は僕には好意がもてないのだ。しかしこんなことを言つたつて始まらないがね。
東　皆腹のなかでは不平を持つてゐるのだね。だから税なぞをおさめる時でも、国民や、市民の義務をよろこんで果してゐると言ふ気になれないのだね。
広雄　さうだよ。国民の義務、又市民の義務なら果せるだけ果したいと思ふが、さう言ふ信用が出来ないのはいゝものぢやない。
東　それはさうとして、今日来たのは、ある人にたのまれて来たのだがね。広一郎君にはまだおよめさんの話はきまつてゐないのかね。
広雄　まだきまつてゐないのだ。目下捜索中だよ。しかし当人に聞いたわけではないがね。まだ好きな人が出来てはゐないやうだ。へんな女を好きになられては困ると思つて早くきめたいと思つてゐるが、どうも慾が深くつてね。中々いゝ人が見つからないのさ。
東　それなら、いゝ人があればもらつてもいゝのだね。
広雄　いゝ人があればね。君の話の人はいゝ人かね。
東　僕も実はまだ知らないのだ。妻がどうだらうと言ふので、一寸聞いて見やうと言つて出て来たのだ。
広雄　まだきまつてはゐないが、しかしあはてゝきめる気もしないのだ。
東　それはあはてゝきめる必要はないね。
広雄　当人が好きになれば別だが、親の目でこの人なら是非もらつてもいゝと言ふやうな人は滅多にゐないものだよ。出来るだけいゝよめをもたしたいからね。
東　それはさうだ。しかし当人に任せておくのも考へものだね。

僕なんか、それで失敗したものだ。

米子　あんなことおつしやつて。

東　今のではないのですよ。今のは仲人の話でもらつたのですが、その前は所謂自由結婚なのでしたが、どうも面白くなかつたのです。信用がおけなかつたので、今のは可もなく不可もなしで、まあ僕には丁度いゝと言ふ処ですがね。前のは一寸綺麗でしたが、信用が出来なかつたのです。

米子　今の奥さまは随分美しい方ぢやありませんか。

広雄　君にはすぎてゐると、こいつは言つてゐるよ。

米子　それはあなたがおつしやつたことよ。

広雄　さうだつたかな。

米子　私も同感でしたけど。

東　ます〳〵風向が悪いですね。しかし妻のことをほめられるのは悪い気はしませんよ。

広雄　随分あてられたものさ。

東　僕の方がなほあてられましたよ。奥さん。

米子　そんなことはございませんでしやう。私はもうこゝに来てから馬鹿々々と言はれどうしなのですから。

東　さうですかね。僕には、仲田はいつもあなたのことを利口だと言つて自慢してゐましたよ。

米子　あなた、本当。

広雄　東がのろけるから、まけずにのろけてやつたゞけさ。本当にさう思つてゐたわけじやないがね。

米子　まあ。ひどい。

東　奥さん、奥さんの前だからあんなことを言つてゐるのですが、仲田の奥さん崇拝と来たら大したものでした。

米子　それは結婚する前の話でしたよ。

東　さうですかね。

広雄　そんなことを言ふものぢやない。

米子　だけど、私もあの時分は仕合せでした。

東　今はお仕合せぢやないのですか。

米子　今では後悔してゐるのですけど、もう少しおそすぎますわね。

広雄　お互ひ様だよ。後悔しない夫婦なんて全世界をさがしたつて、二組とはあるまい。

米子　一組はあるのですか。

広雄　一組位あるとしておかうじやないか。東夫婦のためにね。

東　君達夫婦の為じやないのかい。

（三人笑ふ）

広雄　僕のやうな仕事をするものは結婚しない方が本当だと時々思ふが、しかし一人でゐられる人間じやなささうだ。

米子　本当にあなたのやうな人は妻をもつ資格はありませんね。私だから辛抱出来たのですよ。

広雄　お互様だよ。

米子　まあゝ。

広雄　それで君の話した娘の人は君は知らない人か。

東　知らない人だ。僕は大がい駄目だらうと言つたのだがね。ともかくたのまれたのだから、もしまだだつたら、写真だけでも見せて来てほしいと言ふので。

広雄　写真持つて来たのか。

東　持つては来たのだが。あまりいゝ写真でもないのでね。

広雄　ともかく見せてもらうか。

東　これなのだが。
広雄　（米子に渡しながら）どうだね。
米子　中々綺麗な方ね。
広雄　それ程でもない。
米子　いゝえ中々、綺麗な方ですわ。
広雄　気に入つたか。
米子　当人でなくては。
広雄　見せる必要もあるまい。
米子　それだつて見せないで御かへしするのは悪いわ。
東　そんなことはありません。僕もあまりのり気ではなかつたのです。もつといゝ人が見つかつたら、お知らせしませう。
広雄　いゝ人があつたら、是非知らしてもらひたいね。しかし滅多にそんな人はないだらうがね。
米子　あなたに気に入る人なんかありませんわ。
広雄　ないとも言へないよ。天下はひろいから。
米子　しかしそんなことを言つてゐる内に、あの子はへんな女が好きになるかも知れませんわ。
広雄　大丈夫だよ。
米子　私はなんだか心配なのです。
広雄　なに、まだ大丈夫だよ。
米子　ともかく二三日この御写真、拝借しておいて、見せて見ませう。
広雄　だめだと思ふがね。
米子　だめでも、様子で、いろ〳〵のことがわかると思ひますわ。
広雄　好きになつても困るよ。
米子　大丈夫ですよ。
東　へんなことにこの写真がつかはれるわけだね。
米子　少しわるいわね。
広雄　かまはないね。
東　かまはないが、しかし駄目だつたら、すぐ返してほしいのだ。他にあたつて見たい処もあるのだから。
広雄　どつちもどつちだね。
東　それなら僕は今日は失敬するよ。
広雄　それなら二三日の内に僕が写真返しがてらに出かけるよ。
東　あゝ、待つてゐる。それでは奥さん、失礼します。
米子　勝手なこと許り申しまして。
東　お互さんですよ。
（三人退場、米子まもなく登場、かたづける、写真を見る）
広一郎　（登場）お母さん、一寸村野の処に行つて来ます。
米子　さうかい、行つておいで、広一郎お前に一寸見せるものがある。
広一郎　何んです。
米子　之を一寸ごらん。（写真を渡す）
広一郎　（見て）之がどうしたと言ふのです。
米子　お前にどうだと言つて東さんが持つていらつしたのだよ。
広一郎　まあ、東さんて余計な世話をやく人ですね。
米子　お前には気に入らないのだね。
広一郎　気に入るも入らないも、当分僕は結婚なんかする気はありません。
米子　どうして。
広一郎　僕は一人でゐられるだけ、一人でゐたいのです。結婚なんて考へたこともありません。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com